

幸阿彌家文書 (公刊)

梅ヶ枝御硯箱日記
唯一心

梅ヶ枝御硯箱日記

享保三戊戌年四月

梅ヶ枝御硯箱日記

一廿八日御細工所より呼ニ來罷出岡田庄五郎殿矢田堀兵太夫殿御目懸り御小納戸へ通り八つ過に新部屋にて御側衆有馬兵庫頭殿御小納戸衆桑原權左衛門殿御目懸り角入掛子有覆輪かけ御硯箱之黒地握之葉御硯箱梨子地梅ヶ枝御硯箱之目利致候様御付段々存寄申上候

一廿九日御城より呼ニ來罷出暮前新部屋にて有馬兵庫頭殿御目懸り上代様蒔繪之寫御尋有之右存意申上候昨日拜見仕候梅ヶ枝御硯箱ハ東山殿御物名物之段申上ル先祖道清之作と申上ル

一五月二日御城より召罷出銀谷兵右衛門殿御目ニ懸りて時斗御間へ通り矢代休完老逢名物書卷物長安認め置在之候書面上ル有馬兵庫頭殿御覽取被成候

一七日御城へ罷出岡田庄五郎殿高麗彌八殿逢候取次家田平左衛門殿同道時斗御間にて道竹老ヲ以有馬兵庫頭殿御仰候先日梅ヶ枝御硯箱出來候にて何程入用懸り可申候と由被仰渡候金粉梨子地昔之位に可仕候と窺候處其通り可仕由被仰候御入用書付明後日認メ上可申由御請申上候

一九日御城罷出神谷兵左衛門殿逢伊藤五右衛門殿遠堀五郎殿同道時斗御間にて梅ヶ枝御硯箱御入用書付道竹老へ渡ス御入用書之寫如左

一覺 梅ヶ枝御硯箱 壹面 諸事御本之通り仕立候

御 入 用

金三兩壹分 本地より中ぬり迄漆手間雜用

金八 兩 蒔繪書手間作料

金貳拾七兩 附金粉梨子地切金

但昔之位ニ被候諸色共

梅ヶ枝御硯箱日記 (公刊)

金五兩貳分 細工人飯米雜用

金貳兩貳分 研仕立炭吉野紙漆朱

諸色小間物共

合五拾三兩

右出來日數九十日程

但下地蒔繪共段々能からし不申候へは昔之仕立ニ難似合御座候に付日限懸り可申候

五月九日

幸 阿 彌 伊 豫

一右之入用書之外ニ別紙口上書上ル如左

一梅ヶ枝御硯箱寫仕候御入用書別紙指上申候乍恐私先祖仕立申候御道具寫ニ御座候間何分ニも被仰付被下候様に奉願上候爲冥加之自分仕候分十年間料積りニ入不申御入用之内除き申候 以上

五月九日

幸 阿 彌 伊 よ

一十一日御城へ罷出矢田堀兵太夫殿逢御小納戸より梅ヶ枝御硯箱直段引ケ無之義之由御申出ル明日御返答可申上度御挨拶御役所より在之候

此語ハ兵庫頭殿よりいまた被仰付候ニテハ無之候へ共伊與呼出し吟味可仕之旨之由

一十二日今朝御門明ケニ御城へ罷出候齋藤安左衛門殿萩原又八郎殿被出候段々吟味可仕之旨兩人に兵左衛門殿御仰渡し再吟味之上叡前直段書付之上へ付札致御役所より被出候付札如左

此直段之義吟味仕候所只今粉梨子地其外

諸職人手間諸色高直ニ御座候ニ付職ニ而ハ御細工所

難差上由申候へ共再々吟味仕候四拾九兩にて致上させ可申候

一十六日梅ヶ枝御硯箱之寫御本之通り隨分少も違無之似寄様候ニ仕立上候様ニ

三三

有馬兵庫頭殿新部屋ニテ神谷兵左衛門殿渡合被仰付申候

一右御本之御祝箱今日御役所ニ差置相歸

近所出火之節御役職夜以後排燈

差出置候事右之御本御祝箱火急

之砌万事指置御役所へ持參仕候事

組之衆中謂付被申候事に御仰渡候

一十七日御本之御祝箱今日手前へ下ケ木地屋十兵衛呼寄御本とらせ則木地申付

候木地御本取仕迄は右之御祝箱御役所へ上ケ置候奥使衆人上ケ下ケ之砌被

參候傳兵衛清五郎粉屋呼寄御祝箱之見分爲致申候高麗彌八殿堀五太夫殿黒澤

清二郎殿御出御道具見分在之候

一矢代休意老道竹老長甫老嘉朴老

右之衆御道具在之内ハ風烈之節被參

かねも可在候之由心懸可被下候事

一廿一日御城罷出兵左衛門殿兵太夫殿五右衛門殿庄左衛門殿へ御本之御祝箱請

取手前へ下ル木地見合手板仕候様申上候奥使平太夫相添申候

一右御祝箱預り置候ニ付御役所へ證文認メ出候高麗庄左衛門殿請取被致申候如

左

覺

一梅ケ枝御祝箱 壹面

右私方へ下ケ御祝箱持參預り置申候最近所出火之節ハ早速右之御道具御役

所へ持參指上ケ可申上候 以上

戌五月廿一日

幸 阿 彌 伊 豫

御 細 工 所

一昨日十九日御斷相濟候山御役所より大久保佐渡守殿へ被上候書付如左

覺

上候五人出入御門御斷御目付衆迄被仰渡可申候

五月

右之書付佐渡守殿御請取早速御門之御斷相濟候也

一今日木地出來候ニ付御本之御祝箱引合直候所再吟味木地屋十兵衛終日呼寄改

申候

一廿二日高麗庄左衛門殿御番明ケ梅ケ枝御祝箱之義ニ付御頭兵左衛門殿より之

口上被仰聞候

一傳兵衛清五郎今日より呼手板爲致候

一昨夜猿樂町之出火在之早速静り候其砌御役所泊り組頭高麗庄左衛門殿右之御

祝箱此方ニ在之ニ付被參候伊よ御目ニ懸り早速に御歸候奥使平太夫小遣共都

合四人御役所より出候

一御祝箱木地太郎兵衛ニ相渡今夕より下地申付候

一廿三日傳兵衛參り手板致申候

一廿四日傳兵衛清五郎手板致申候

一當月二日有馬兵庫頭殿へ指上置候名物祝箱之卷物書物等今日御役所へ御返シ

此方受取候

一廿五日傳兵衛壹人參り御本繪様寫申候

一廿七日傳兵衛壹人參り御本之繪寫

一御祝箱見分豊田十兵衛殿内田友衛門殿大内又四郎殿 源八郎殿御出

一廿八日同傳兵衛來寫仕候

一廿九日傳兵衛清五郎手板致候

一六月朔日御祝箱誠仕立板傳兵衛清五郎來仕候

一二日傳兵衛參御祝箱ヲキメノゴ書致候

一三日傳兵衛清五郎參手板致申候預り内致候外ニ手板岩再三仕直シ紛も此度改

誠ニ致せ爲時見申候

一四日傳兵衛清五郎休

一五日傳兵衛ゴ書致候清五郎手板致候

一六日傳兵衛コ書致申候

一七日清五郎參手板致候

一八日下繪にて懸御目ニ候御視箱中塗出來太郎兵衛持參御本と合せ候所少しも
違在之地付足シ追テ研合可申候由

一九日視箱手板傳兵衛仕候喜八來古手之厚寄申候

一十日傳兵衛來ル

一十一日清五郎來ル

一十三日御視箱中塗出來太郎兵衛引合好遣ス

一十四日傳兵衛清五郎來

一十九日御視箱中塗出來面直シ

一廿日御視箱中塗出來仕候傳兵衛來

一廿一日御視箱面惣躰清五郎ニ申付角々本紙ト切形ト見合さひ付被直候

一廿二日傳兵衛清五郎來直仕候

一廿三日清五郎來下地さひ付直申候

一廿四日同様中塗繕塗手板致候

一廿五日下午繪細書ふたのうら朝より致返し兩人

一廿七日細書切金胡印共兩人ハツ迄清五郎仕立仕ハツ前細工切金ノ胡印出來手
板出來上ル七ツ前御細工所の伺上ル手□五日御伺候

一廿九日ハツ過御城罷出御視箱中ぬり下繪手板岩之所三色梨子地梅の木少々仕
様共ニ七ツ時新部屋へ通り兵庫頭殿御出一々御覽候金色位御聞義常只今上々

粉四十ノ位ニ御座候山より出候砂金百目を鹽入燒申候四十日燒仕候切手板ニ

初位三十八匁余位吹仕候三十七匁余位是義ニ似合候間仕返し粉なし地共仕候

底共々にてかなはいはね上り申候梅の木上代之金色種々工風致候御前へ不殘

御持參段々御出候へ共梅の花金ほと古ひ申候是はいかゝ仕候いたし候間ぬり

しもの可仕候哉其所傳受少し御座候先祖代々御惠觀御守難有御座候

一卅日祖師明神惣て願御禮甚兵衛谷中國日院圓入江遣す淨心寺寂延寺へ御手紙
申入候

一七月朔日御城罷出取次堀五兵衛殿と申候御側衆方坊主衆咄し御聞候兵庫頭殿

御仰候幸阿彌下手と聞候所此度仕り見分に上手にて名人成仕形と御申候惣躰

殊の外評件宜有之と咄し御申候取次平左衛門兩人咄し御座候難有以全職之冥

加に相叶候

一梅ヶ枝御視箱寫之方水入形御好にて奇しく可有之候下水板は御水入形彫申候

間ほらせ申候 御水入出來其ひつ臺を以くり入後に塗申候此段御伺上候御細

工所より兵庫頭殿御伺上御取可申候

一二日かけの御視箱中ぬり出來候今日傳兵衛喜八來おきめ仕候

一三日かけ視箱中ぬり角直し清五郎傳兵衛喜來

一四日清五郎本出來御視箱のなかい月付申候

一五日清五郎來

一八日右同斷かない付申候

一御本御視箱此度出來仕掛之御視箱共盆中細工不仕候間御細工所へ願置奧使兩
人來候附文左衛門に持せ相出し平藏殿懸御目指上候立合御返事番も預り御□

へ入候て歸り候

一十八日御視箱御本又此度出來仕掛候御視箱共御細工所へ罷出兵左衛門殿懸御

目改請取奧使兩人付下げ申候五郎衛門

一八月八日同金具研申候清五郎傳兵衛來

一十日同ふたの内雲書梨子地蒔兩人來

一十一日同身之内梨子地蒔

一十二日なし地ぬり

一十六日同外岩岸雲書傳兵衛兩人來

一十七日なしち岩始なしち蒔喜八兩人

一十九なしちぬり

一廿日なしち

一廿一日なしち内研ぬり

一御硯箱同日書付御細工所上ケ置候

梅かへ硯箱寫時繪之日數九十日程には出來仕と奉存候 右之段前方申上候所殊之外手間人尙月中出來兼申候來月廿日過頃にて御座候日延御仰付被下候様奉願上候

八月

幸阿彌伊豫

一右の書付今朝兵左衛門時斗間御通り兵庫頭殿右書付懸御目候日數よほとに有之とく可仕様廿日願上可候由被仰候相歸り甚右衛門傳えよく願上申候

一廿二日なしち研かけ硯相直申候

一廿三日なしち地研清五郎かけ硯細書致候

覺

一寛保元年酉五月廿八日御細工所より梅ヶ枝御硯箱先年御褒美被下候委細書差出候様に岡田源七郎殿被仰渡左之通書付出す

梅ヶ枝御硯箱

享保三年五月十六日御寫被仰付候同九月廿日右御硯箱出來指上げ申候同壬十月十一日右代金相渡候様に大久保佐渡守殿被仰渡請取申候同壬十月十八日明十九日御城の罷出様に御書付出る

同壬十月十九日右御褒美黄金壹枚頂戴仕候大久保長門守殿大久保佐渡守殿出燒火間被仰渡候御目付高田忠左衛門殿御細工所久保出平藏殿御立合

右之通に御座候 以上

幸阿彌因幡

安政二乙卯十月十五日寫

古満是眞藏

唯 一 心

恐入

御公儀難有事時々刻々不可忘

先祖家之蔭二親之大蔭慈悲辱儀朝暮可存知肝要也

難在 御代ニ出生冥加ニ相叶候事

天道御惠佛神之御加護可仰可尊

御扶持居宅被下置安堵之事

兩親有兄弟祖父有祖母有伯父伯母叔父母家門親類縁者親族ニ無不足弟子手

代眷屬満リ

其大将たるへき事身持大事也下賤之眞似いたせ候間敷候事

おこらす大へいならず大様ニ心持へし大丈夫心ニてふとからず

慈悲心ニして何事もきつと正しく致へし

人ニあなとられぬ様ニして下タ手ニ物致へし侍之心ニして長袖町人と云事

不可忘

國之王ニもおとるましき志を持ってへり下り卑下之心可思

家業無簡斷修行可仕其棟梁たる事志大事なり

蒔繪之儀ニおるてハ第一也といふ事不可忘自慢少もあるへからず日本國中

ニ我職ぬりまきへの事に少も恐事なしとおもひてみちん無油斷藝古可致候

事

世間ニ功者有上手有洛人有細工き、有工夫有勤者有智恵有おそるへし慎へし

し手前をはけむへし

己とん成と云事を不忘人をあなとる事なけれ腰高からせて禮あつく可致候

めつたにはいかゝむ事なけれ

唯 一 心 (公刊)

あるくに足音高からず座す時片ひさヲかゝめて心を付て居へしかりそめニも畏テ座すへし

懐手不仕肩ぬきひさまへり仕ましくねむりあくひ致ましくもの事ニせいつきぬ様ニ心をねりてゆふニ持へし

諸事ニ無油斷たとひ子ともあそひにても人と耳さゝやき不通ニいたすましくたちきゝのそく事かならすいたすまし萬事心を付さし出申間敷候事朝夕

食事何にても人の給させ候を靜ニ可給くいものこのみ物きらる仕ましく金

銀錢手ニ取申間敷心ニハ皆覽へし心にハ不殘たんれんすへし

塗蒔繪ニ寸法坪つめ付金漆つもり人数細工人手間賃諸色入用重目升目米鹽

贈薪等入事有是皆心の勘を以覺鍛練すへし

讀書して禮儀覺手習して可書致へし大方行ふて知へし其外之事ハ成次第也

天地人道鳥獸畜類甲魚山河千草萬木働止家村雜具諸道具鋸藝能十炷香茶之

湯料理業心法皆繪蒔繪ナリ一事も不殘不知しては成かたし

只塗蒔繪家職業常住座臥二六時中片時も間も無間無精しうしうしやくにて

修行鍛練熟して銘人と可成コト得へき事なり

己上手功者と思ひ慢心する事何の用ニか立間しく世間より名人と被呼候事

肝要なり

一切之事知らずしては成かたし學ハされはおほへす

御用承致す者ハ別而信心肝要也

幼少之者ニ老年之事迄覺ましと思ふへし左様ニ成十一歳之智恵も六十歳の

智も同事

唯次第ニ智恵ニ色ニ付様有の之也智ニ色付様出來て藝古おほへ當分ニてわ

すればやし萬事功をつまねは成かたし短氣ニ心を持すしてふらくと無之

したしく成事なくきうくつ成は又あしくよく心を付可いたし申事

三七

塗蒔繪仕様 道具之名ハ千萬無量也

一木地 檜潟木正目板目刻木挽木作り木つき木指木地添け木地挽物木地

一椀櫻梅ほうの木とち桐杉松柿栗ひるらきけやき櫻唐木類夫くゝのぬり用有

くるう木そる木ちゝむ木のふる木やせる木ふへる木われる木木揃して角々丸

メ挽物は内かん外かん能揃内かへてろくを定メへし

とめさし塗木地にかわ付にへ付切違さしはしハ入内ほそさしありさん廻り

さん廻り足くり足そり足中繼紅口かけて紅口唐とめんそきめんしつみめん筒

はり角丸産「角切」指やろうふたちり有のんこりはた蒔かへて厚ぬりくあいの

かけん専一なるへし

一木地品ニ寄見合可申候角々ニかすかい打ちきり入

一こくそかたこくそしるこくそ苧苧こくそ引こくそ麥こくそ地こくそ

一木地かため生漆一篇ぬり木地のやにとめ布きせの節布々漆木にする迄布ふ

くれ無様

一布若晒よくもミ或ハ白にてつき兩はしの耳たち切

一引地或は引きひ

一上塗 花塗蠟色塗立朱ぬりうるみ朱塗青三ツ黄ヲ、敲塗いちゝぬり程有之

一溜ぬり念入候様は木地ノ上ニさき致きヲ、水入さひ付青砥にて研木目ニ能ト

マリ其上しを、引トクサニてミかき生シフを三篇程引一篇くゝにて右之通り

ミがき吉野うるし水のへ摺漆三篇五へん摺漆かさね候程よし上ぬりよしの

一春慶塗右同斷但くちなしにて仕立しわうハ少あをミさし上ぬり薄く塗かよし

一眞溜塗はきめ合目釘目こくそをかい引地引さひ壹たいに研せしめ摺漆上ぬり

花漆溜ぬり中ぬり乃有之もあり

一かき合塗眞かき合ぬり下地しふ墨引しふを引摺漆上塗花ぬりなり眞かき合さ

ひ持可申候

一花塗

一蒔繪之事 是か程ニ致様認メ様御座候得共如常故中略

其家ニ生れ候者家業大切銘人號取事を可存知候切つまねハならぬなり隨分心之

養生仕息才ニ身まつとらして御用大切ニ仕相勤一家眷屬を育之申事專一なり

信心堅固堪忍剛情謙巽戒愼恐懼己克復禮溫良恭檢讓能可得心候 以上

享保五年庚子二月十六日 土岐氏幸阿彌伊豫後

幸阿彌万助道該 源 長 救 (花押)

御代萬々歳奉仰乍恐臥乞我家代々 子々孫々相續仕 汝爲廉直ニ可持百歳

安政二乙卯十月十日地震中寫之 柴田 是 眞